

## 論文の要旨

論文題目 劉心武の小説の語りにみる個人と社会  
——ラベルとイメージの作用  
氏名 福原 みつ希  
学位 博士 (文学)  
授与年月日 平成 20 年 2 月 20 日

本論文は、劉心武 (1942 年-) の 1959 年の小小説「多麼好的陽光」(何て素晴らしい陽光)「妹妹」(妹)「阿姨」(お姉さん)と短編小説『班主任』(担任教師)(1977 年)及び長編小説『鐘鼓楼』(1984 年)の中の語りから登場人物におけるラベルとイメージの作用の分析を、エスノメソドロジ的な視点を目指しながら行なったものである。語りにおいて、ラベルによって権力作用が生じるその場面を小説中の〈いま-ここ〉とした。大躍進(1958 年-1960 年)から無産階級文化大革命(1966 年-1976 年)とその終結以後の中国社会の移り変わりの激しい時代の中で、劉心武が見つめた中国における個人と社会の姿を見ることが出来る。個人は社会の中で、ある役割を与えられ、レッテルを貼ったり貼られたりする。あるラベルを貼り、カテゴリーに分類する作業は、時には無意識的に既存の解釈図式に基づいて成されている。そのような作業が当たり前のこととされ、自明性の中でラベルから判断が単純化されることで、役割の間では期待が生じ、レッテルによって拒絶が生じる。

第一章では、子供と大人或いは目上の者との間に生じる小さなせめぎあいにおける権力作用を分析した。「多麼好的陽光」では、大人達は協力するために、迷子になった小英のもとに来る。小英が事務室へ連れ去られることはその場からの一時的な排除であり、子供である小英という個人と、大人達によって構成された社会の協力には、拒絶とみられる面があることを指摘した。「妹妹」では、妹に対する兄の皮肉な発言は、妹のことを表わしているのではなく、兄である私が受け入れることのできない兄自身の側面を投影したものであると述べた。小英や妹は、母親を自分で探すことのできない「迷子」や「臆病者」というラベルを見上の者によって貼られる。しかし、彼女達はその劣位のカテゴリーを示すラベルとは関係なく振舞い、彼女達自身が求める自己イメージに近づこうと自発的に努力し、目的を果たす結末になっている。個人の自発性を失うことなく個人と社会が協力し合うことが、十七歳の時に劉心武の求めた個人と社会との関係であり希望であった。そしてそのような描写は『鐘鼓楼』の路喜純の描写に更に深く受け継がれる。「阿姨」では、小紅は両親によって暗黙のうちに、「騒ぐ子供」というラベルに基づいて語られる。しかし小紅は、

両親の意向に合わせて行動することで、劇場に連れて行ってもらうという目的を果たす。小紅は、劇場における暗黙のルールを知らず、騒ぐべきときでないときに騒ぐことで母との約束を破ったことになり、母と離れて休息室に連れ去られる。暗黙のルールを守れない場合は、その場から排除される社会を表わしている。劇場にいる大人と、休息室でお姉さんが話す同じ話を何度もききたがる小紅の対比は、どちらにしてもその社会状況におけるルールに縛られる人々と社会に流される個人の危うさを表現している。「妹妹」における兄は、兄であるために、妹に対して水泳ができないと告白することができない。それは兄という面目があるために、ときには真実を述べないことが許容されていることを示している。個人は、社会によって与えられたラベルのもとに役割やルールに基づいて行動する。しかし、『鐘鼓楼』での薛大娘の描写に見られるように、役割というラベルによる単純化は、社会における様々な役割を十分に機能させているとは言えないのである。

第二章、第三章では、『班主任』における宋宝<sub>一</sub>と謝惠敏の問題と、それを取り巻く人々の潜在する問題について考察した。宋宝<sub>一</sub>は不良少年にカテゴリー化され、そのようなレッテルを貼られたために、まだ直接会ってもいない者達から編入を拒絶され、不良少年のイメージからまた「新文盲」など様々にレッテルを貼られる。しかし、不良少年と知識がないこととは直接的な関係はない。彼が盗んだ所持品である小説『牛虻』は、男女の恋愛の挿絵があるというだけで、クラスの者達から読まれる前に悪書とされる。『班主任』において提起された問題の一つは、レッテルを貼ることによってそれ以上関係せずに、解らないまま批判するという態度である。これは、文化大革命の時代に、「四人組」の愚民政策や社会状況によって現れた弊害である。謝惠敏は、同級生によって「杓子定規」などのレッテルを貼られる。青年団支部書記の謝惠敏は、担任教師である張俊石と物事の判断にずれが生じ、組織活動の教えを信じるか教師を信じるか葛藤する。謝惠敏の問題は、移り変わりが激しい社会の中で弊害のある組織活動を妄信し、本当に何を信じるべきか解らない所にある。宋宝<sub>一</sub>も謝惠敏もその社会状況の中で訓化され過ぎたことで、周囲の人々に盲従せざるを得なかった。宋宝<sub>一</sub>と謝惠敏は救うべき対象とされるが、喩え方や構成の仕方をみると、語り手や張俊石の、二人の対象への対応には差異があることがわかる。宋宝<sub>一</sub>の登場があることで、人々が当時極端にレッテルを貼っていた問題が明らかにされ、さらに謝惠敏や彼女を取り巻く人々が当時最も悲劇的な者、最も批判される者とされることを避けることができたのである。『班主任』は、文学という分野から人々がその状況において求めていた団結の場を与え、文化大革命の傷から立ち直ろうとする人々に希望を与えたのである。

第四章では、『鐘鼓楼』の登場人物の一人である薛大娘が、姑の役割があることから、嫁に対しては不愉快さを表現し文句を言うが、その役割が作用しない場合は不安になることを示した。縁起に反することを忌む薛大娘は、縁起が良いことを通そうとするために、麗穎の親切を拒むことで、結婚式の順調な進行を逆に妨げる。思い通りにいかないという思いによって、思い通りにいかない現実を薛大娘は引き寄せているように描かれる。嫁姑

問題は顕在化しているものであるが、語り手によって妻としての薛大娘とその夫、母としての薛大娘と息子の関係が詳細に描かれなかったのは、その問題が潜在化しているためである。問題として認知されている関係は語るができるが、認知されず語るのことができない状況にある関係は語られることがないのである。

第五章では、レットルによって困難にあう個人とその社会でのあり方が、路喜純の描写によってより詳細に描かれていることを示した。路喜純は、隣人達によって、彼の両親の職業に基づいて一方的に判断され、不良少年にカテゴリー化されるが、不遇でありながらもそのように振舞わないことで、ラベルに囚われずよりよい自己イメージを保つ。両親の身分に対するレットルが子供である路喜純においても、隣人達や教師によって受け継がれている。路喜純は、二人の師の協力を得ながら、過去よりも未来をどうしたいかに基づき、今を大切に行動する。薛家の結婚式において料理人を務め、薛家の人々と料理人という役割を超えた良い関係を持つ。

第六章では、姚向東が周囲の人々からのラベルを内面化し、そのラベルに合った出来事を現実化してしまうことを明らかにした。姚向東は、路喜純とは逆に、周囲の人々が彼に対して貼るラベルに囚われ、それに合わせた振る舞いをする。それによって、学校でも家でも居場所がないと感じ、父親に叱られて家を飛び出す。しかし、父親の姚向東に対する発言と暴力的な態度は、父親自身の不満足感から出たものであり、そのような自己像を息子である姚向東に投影して発せられたものである。姚向東は彼を拒絶しない友人に借りて着ているジャケットを汚してしまい、弁償しようとして薛家の金品を盗んでしまう。友人を大切にしたいという思いが裏目に出る。姚向東は盗んだことを見つかるのが不安になり、奪うという行為によって、より居場所をなくし孤独になる。

本論では、語り手による小説内のあるカテゴリーに属する人物のラベルをめぐる語り方・語られ方の分析を中心に行なった。1959年から1984年にかけて社会的変化があるにもかかわらず、劉心武のこれらの小説においては、変わらない問題——自明性の中で生き、解釈の枠に依存するという問題——が提起されている。また一方で社会によって解釈の図式はそれぞれであり、何が肯定され否定されるかは時代の流れによって変動するものである。本論で分析した人物の多くは、その社会における集団や優位に立つ者によって、劣位のカテゴリーでイメージされレットルを貼られる。また人々は役割というラベルによって単純化し、既存の解釈図式に基づいて判断し、物事を「順調」に進ませようとする。しかし、単純化によって、役割をめぐる関係に亀裂が生じ、「順調」さが失われる面も見られる。マジョリティが常識的知識によってマイノリティを支配しようとする時、解釈の図式のずれが現れてくる。エスノメソドロジー的な視点の文学での有効性は、カテゴリー化が、ある役割の正当化やレットルに基づく拒絶のために、どのように当たり前になっているかを見ることが出来る所にある。本論は、現実にはその社会状況において常識として片付ける人々の方法に、文学から接近を試みたものである。